



イスラーム国日本人質事件

(一財) 日本エネルギー経済研究所
中東研究センター

研究理事 保坂修司

はじめに

2014年6月末、「イラクとシリアのイスラーム国 (ISISあるいはISIL)」と名乗る、イラクおよびシリアを拠点とするテロ組織は、イラク第二の都市、モスルを制圧し、カリフ制の樹立を宣言、名前から地名をとって「イスラーム国 (以下ISと略)」と改称した。ISの勢いはその後も衰えず、イラク西北部やシリア東部を中心に勢力を伸ばしていった。

国際社会はこれに対し「有志連合」を結成、ISの「領域」への空爆を開始した。ここに至り、さすがのISの勢いにも陰りが見えはじめ、戦線は膠着状態に陥った。有志連合の空爆は単にISの軍事的な拠点だけでなく、ISにとっての重要な収入源であった石油関連施設をも破壊したため、折からの原油価格の低落もあいまって、ISの収入は大幅に減少したと考えられている。

こうした弱体化の兆候も見え隠れするなか、ISは新たな戦術をとりはじめた。すなわち人質戦術である。もちろん、ISは、人質をとって身代金を要求するとか、人質を殺害して、見せしめにするといった戦術を、ISになる以前からとってきていた。しかし、こと欧米人人質に限定していえば、明らかに8月以降、戦略的な位置づけが変化したといえる。後述するように、有志連合の空爆とほぼ同時に欧米人の人質が殺害されはじめたのは、これによって有志連合参加国に恐怖を植えつけ、あわよくば軍事攻撃を躊躇させる狙いがあったためであろう。

そうしたなか、今年になって突然、ISは日本人を人質にとったと発表したのである。本稿は、この日本人質事件を通してISの戦術を分析しようとする試みである。事件をきっかけに日本では一気にIS関連報道が過熱したが、そうした報道のなかにはほとんど真偽を検証できない怪しげな記事も少なくない。したがって本稿では、主としてIS側が公開した声明などに依拠しながら、分析を進めていくこととしたい。

おそらく今後、さまざまな情報が出てきて、事件そのものの骨格も徐々に明らかになっていだろう。本稿はあくまで2015年2月はじめの時点で入手可能なIS側の公式声明などにもとづく予備的な分析である。それゆえ、将来的に結論や分析について大幅な修正がほどこされる可能性もあることをあらかじめ指摘しておかねばならない。

日本人人質事件

2015年1月20日、ISと思しきグループがインターネット上にビデオを公開、彼らが日本人2人を人質にとっており、72時間以内に身代金2億ドル（約240億円）を支払わなければ、2人を処刑すると脅迫した。

ビデオ画面の左上にはISのメディア部門であるフルカーン・メディアのロゴとイスラーム国の旗がついており、またYouTube等の動画投稿サイトやその他の動画置き場を利用しているなどイスラーム国の声明発表パターンと似ているところから、ビデオはISのものにまちがいないと推測された。

ビデオ画面には民間軍事会社の経営者、湯川遥菜氏とフリージャーナリストの後藤健二氏とみられる2人が沙漠のような場所で跪かされていた。湯川氏は2014年夏にシリアで誘拐されたとされ、同年8月17日に何ものかに暴行を受けているようにみえるビデオがインターネット上に公開されている。このビデオにはクレジット等がついておらず、湯川氏がどの組織によって捕まったかも不明であった。しかし、ビデオのなかで湯川氏を尋問しているものは、湯川氏にISのスローガンでもある「イスラーム国家は存続するDawla al-Islām Bāqiya」と叫ばせており、犯行グループとISとの関係が強く疑われた。湯川氏はビデオのなかで、自分がカメラマンだと主張していたが、尋問する側は、湯川氏が銃を所持していたことなどから、スパイであることを強く疑っていた。

一方、後藤氏は2014年10月にシリアに入ったあと、行方がわからなくなっていた。日本国内の報道によれば、後藤氏が行方不明になったのち、日本にいる同氏の妻のもとに身代金を要求するメールが送られてきており、日本政府もそれについては承知していたという。

ちょうど同じころ、日本の安倍晋三首相は中東歴訪中で、1月17日にはカイロで開かれた日本エジプト経済合同委員会で日本の中東政策について演説を行い、テロや大量破壊兵器拡散の脅威を指摘し、「国際社会に与える損失は計り知れない」と危機感を表明、さらにISの脅威にさらされているイラク、シリア、トルコ、レバノンの難民支援などに総額2億ドルを拠出すると述べていた。

犯行グループ側の2億ドル要求は明らかにこの2億ドルを受けてのことと思われる。実際、ビデオ冒頭には、NHKの海外向け放送で安倍首相が演説している場面が使われている。また、2人の日本人を脅迫する黒ずくめの男性も、日本が「われわれの女子どもを殺し、イスラーム教徒の家を破壊するのに1億ドル、ISの拡大を阻止するために、さらに1億ドルを喜んで寄付した」と主張、日本政府が2人の命を救うために、2億ドルの身代金を支払うべく、日本国民が政府に圧力をかけるように呼びかけている。安倍首相の演説が、犯行グループの2億ドルの身代金要求のきっかけとなっていることがうかがえるだろう。

筆者紹介

慶應義塾大学大学院修士課程修了。在クウェート日本大使館・在サウジアラビア日本大使館専門調査員、中東調査会研究員、近畿大学教授等を経て現職。主な著書に『乞食とイスラーム』（筑摩書房）、『サウジアラビア』（岩波新書）、『オサマ・ビンラディンの生涯と聖戦』（朝日新聞出版社）、『イラク戦争と激動する中東世界』（山川出版社）等。

英国訛りの英語を話す黒ずくめの男は、これまでもISのビデオに登場し、ISの人質になっていた欧米人の殺害に関与したとされる通称「ジハーディー・ジョン」という人物と推測されている。なお、このビデオでは湯川・後藤両氏とも一言もことばを発しておらず、ビデオそのものにも合成の跡があることが指摘されるなど、これまでのISの人質関連の声明との相違点が問題視された。

なお、2人の日本人はオレンジ色の服を着せられており、これは、米国のグアタナモ海軍基地に収監されたイスラーム教徒のテロ容疑者に着せられた囚人服を想起させる。実際、これまでイラク等で発生した人質殺害事件では、欧米人の場合、犠牲者はしばしばオレンジ色の服を着せられており、今回もそれと同様の措置と考えられる。犯行グループの男のことばのなかには「十字軍」という指摘があり、ISが日本と欧米を中東政策において同一視した可能性もある。前述のとおり、湯川氏に関しては2014年8月のビデオではスパイ容疑が指摘されていたが、後藤氏に関しては結局、何の容疑で捕えられたのか、いっさい明らかにされておらず、その後もこの問題は完全に無視されていた。

第2ビデオ

72時間の期限が経過したのちの1月24日夜、後藤氏とみられる人物の音声ビデオがインターネット上に投稿された。同ビデオでは、後藤氏は静止画のみで登場し、彼と思しき英語の音声がつけられていた。また後藤氏は両手で写真をもっており、その写真には湯川氏と思われる人物が地面に跪かされているものと、その横には切断された首を乗せた湯川氏の遺体らしきものが映っていた。

音声は、72時間の期限内に行動しなかったとして安倍首相が湯川氏を殺したと非難、その一方で、彼らが「より簡単で、より公平な」新たな要求を提示したことを明らかにした。すなわち、2005年にヨルダンの首都アンマンで発生した自爆テロで死刑判決を受けているイラク人女性、サージダ・リーシャーウィーSājida al-Rishāwīとの捕虜交換であった。

2005年の事件は、イラクのアルカイダAQIの犯行とされ、有名なハリウッドの映画監督兼プロデューサーのムスタファー・アッカドを含む数十人の犠牲者が出たことで知られている。サージダは、自爆用の爆弾を体に巻いていたが、爆弾が爆発せず、ヨルダン当局に捕えられ、その後死刑判決を受けたが、まだ刑は執行されておらず、ヨルダンの刑務所に収監されていた。

このビデオのなかでは捕虜交換の期限について明言されておらず、事件が長期化する可能性もあったが、一方、後藤氏のことばのなかに「自分の命もあとわずかthese could be my last hours in this world」という部分があることから、時間的余裕はないだろうと考えられた。なお、ビデオのなかで後藤氏と思しき人物がしゃべっている英語は、きちんとしたもので、誰か英語ネイティブのものが書いた原稿を後藤氏が読まれている可能性も指摘できるだろう。ただ、この英語が、イギリス英語なのか、アメリカ英語なのか、筆者には判断することはできない。上に紹介した英国訛りの英語を話すジハーディー・ジョンの関与の程度を含め、検証が必要かもしれない。

第3ビデオ

1月27日夜には第3のビデオがインターネット上に投稿された。やはり静止画で後藤氏と思われる声が、英語でふたたびサージダ死刑囚の釈放を呼びかけた。このなかで後藤氏は、サージダ釈放を遅らせているヨルダン政府が、自分の解放の障害になっているとし、24時間以内に捕虜交換が行われないと、命がないと述べた。

なお、この後藤氏のことばでは、ISに拘束されているヨルダン軍パイロット、ムアーズ・カサースベ Mu'adh al-Kasāsbe の名前が言及された。サージダが釈放されなければ、カサースベが、後藤氏よりも先に殺されると指摘、ヨルダン政府の一刻も早い決断を要請したのである。このことは、状況をさらに錯綜させる結果を招いた。

カサースベは2014年12月に北シリアで墜落、イスラーム国の捕虜になっていた。カサースベはその直後、ISの英文機関誌である『ダービク』第6号で大きく取り上げられるなど、ISも彼の人質としての役割を重視していたことがうかがえる。ヨルダン国内でも当然、関心は高く、彼の解放のため前述のサージダ・リーシャーウィーとの捕虜交換の話も報道レベルではしばしば言及されていたのである¹¹⁾。このビデオのなかで、IS側ははじめて後藤氏、カサースベ、そしてリーシャーウィーの3人を結びつけるロジックを提示したことになる。ただし、交換の対象はあくまで後藤氏とリーシャーウィーであり、カサースベはあくまで、リーシャーウィーが解放されれば、殺さないといった付随的な役割にすぎなかった。

ヨルダン国内では、多くの犠牲者を出したテロの実行犯を釈放することに反対する声も大きく、またその一方でヨルダンのアブダッラー国王自身、パイロット救出が最優先であると述べたとされており、可能性としては後藤氏とカサースベをリーシャーウィーと交換する2対1、あるいはリーシャーウィー以外のテロ容疑者を解放する2対多の捕虜交換という選択肢が浮上したといえる。

一方でカサースベの出身部族、バラリシエ Barārishe 部族やカサースベの父親などがカサースベ救出のため発言をしたり、動いたりしており、カサースベ・後藤氏とリーシャーウィーの交換への下地もできつつあるようにみえた。

しかし、ヨルダンのムハンマド・ムマニー情報担当相は1月28日、ヨルダン人パイロット、ムアーズ・カサースベが無事解放されれば、サージダ・リーシャーウィーを釈放する用意があると発表した。このなかでは後藤氏の名前は言及されておらず、読みようによっては、ヨルダン政府は、本来あった後藤氏とリーシャーウィーの1対1の交換を、カサースベとリーシャーウィーの1対1の交換へと無理やりに転換しようとしているようにもみえる。

もちろん、カサースベの命は後藤氏のそれよりもさらに限定されていたわけだから、カサースベを救えという国民世論の高まりから、ヨルダン政府がまずカサースベの名前を出したのは当然であろう。

ヨルダンのナーセル・ジュエデ外相は28日、ツイッター上で、ヨルダン政府がカサースベの生存確認を要求したが、(IS側から)返答がないと述べている。当然、情報相の発言はヨルダンの国営メディアを中心にさまざまな媒体で流されたため、ISにも伝わっ

たはずである。

29日には、新たに後藤氏と思しき声でメッセージが現れ、「モスル時間で1月29日日没までにトルコ国境においてサージダ・リーシャーウィーとわたしの命の交換の用意ができていなければ、ヨルダン人パイロット、ムアーズ・カサースベはただちに殺されるだろう」と述べた。ヨルダン政府の声明にもかかわらず、ISのこのメッセージでは、後藤氏とリーシャーウィーの交換には言及されたものの、カサースベの釈放については一言も触れられていない。この前の声明と同様、カサースベは単にヨルダン政府への圧力として脅迫の材料に利用されているにすぎない。

1月29日の日没までにヨルダン政府がリーシャーウィー死刑囚をトルコ国境まで移送するのか、はたしてどのようなかたちで後藤氏との捕虜交換が行われるのか、実際に行われるかどうかも含め、世界の耳目が集中した。また、1対1の捕虜交換に、カサースベが入ってくるのか、あるいはカサースベは別枠での解放交渉になるのか、にも関心が高まっていた。

結果的にはヨルダン政府はリーシャーウィーをトルコ国境まで移送せず、彼女の釈放は行われなかった。当然、後藤氏もカサースベの解放もならなかった。その後、しばらく動きが停滞したため、ISの次の一手にさまざまな憶測が流れていった。

日本人殺害ビデオ

ISは結局、2月1日（日本時間午前5時ごろ）、インターネット上に、同組織に誘拐されていた後藤健二氏を殺害したとする動画声明（「日本政府へのメッセージ」）を投稿した。ツイッターなどへのリンクの貼り付け、動画投稿の方法、さらに動画制作のクレジットの貼付等、これまでのイスラーム国の声明発表のやりかたと矛盾する点はなく、声明の信憑性は高いと思われた。

ビデオの長さは1分7秒でアラビア語の字幕がついている。登場人物は、オレンジ色の服を着せられた後藤氏と、日本人誘拐に関する最初のビデオに登場したのと同じと思われる英国訛りの英語を話す黒づくめの男の2人。男は、「ジハーディー・ジョン」と呼ばれていた人物と同じと考えられ、ナイフをもちながら、英語で、日本政府に対し、日本が勝ちようのない戦争に参加したため、「このナイフが（後藤）健二をほふるだけでなく」どこであれ、日本人を殺害することになると述べた。その後、場面がかわって、後藤氏が首を切断され殺害されたとみられる画像が映し出された。

ビデオは、2014年夏以降のISによる欧米人人質殺害ビデオと形式的には一致している。オレンジ色の服は、9.11事件後に米グアンタナモ海軍基地に収監されているテロ容疑者に着せられている服であり、後藤氏が跪かされている点も従来のイスラーム国の人質殺害ビデオと同じである。

このことは、イスラーム国が明らかに日本をイスラーム国への空爆を行っている欧米など有志連合と同一視していることを表している。また、日本が有志連合の軍事攻撃に加わっているとの認識もかわっていない。

ただし、湯川氏に関しては、殺害場面、ないしはそれに至るまでの経緯がビデオで公

開かれておらず、単に後藤氏もっている写真で湯川氏の遺体らしきものが映されているだけにすぎない。この2人の対応の差が何を意味するかは今のところ不明である。もちろん、湯川氏がすでに早い段階で殺害されていたという可能性も否定できない。

一方、「ジハーディー・ジョン」は、声明の終わりで、日本国民が見つけれられるところなら (wherever your people are found), どこでも、殺害されるだろうと警告している。この語は、日本国内で事件が起きるといっても、日本国外、とくに中東やイスラーム世界において日本人、あるいは日本の権益に対し攻撃が加わる可能性が高まったことを示唆しているのかもしれない。

すでにイラク戦争以来、とくに自衛隊のイラク派遣に関する議論がはじまったのをきっかけに日本はAQIやアルカイダ本体AQCにより名指しで非難されていた。ISが今回、日本を敵のリストに入れたといっても、とくに大きな変化はないはずであるが、このようなかたちで世界的な注目を集めるなかで、あらためて敵国宣言されたことで、日本に対する脅威が一時的に大きく高まることは否定できないだろう。

実際、後藤氏の声明などへのリンクが貼られたツイッターやアラビア語掲示板への書き込みには、殺害を賞讃する投稿が行われている。しかし、これは、あくまでISの支持者、ファンに限定されていると考えるべきであり、大半の中東・イスラーム諸国の政府、あるいは国民は日本の対応を支持し、2人の日本人人質には同情的であったことは忘れてはならない。

なお、ISはこのビデオのなかで、ヨルダン政府が解放を求めているヨルダン人パイロットについて一言も言及しなかった。それどころか、そもそもISは、その解放の可能性についてすら一度も指摘していないのである。これまでの声明では、ISの要求が満たされない場合、後藤氏より先にパイロットが殺害されることが示されていた。この点を考えると、今回、パイロットの生存がはっきりするまえに後藤氏殺害ビデオが公開されたことには大きな矛盾がある。この時点で、カサースベはすでに殺害されているのではとの説が流れたほか、新たな交渉の材料として用いられる可能性も指摘されていた。

ISの人質のあつかいについて

ISが施行しているとされるシャリーアでは、人質（戦争捕虜）は、身代金で解放する、捕虜交換で解放する、身代金も捕虜交換もなしに解放する、奴隷にする、首を刎ねて殺害するといった選択肢のなかから自由に選ぶことができる。その意味で、身代金の要求が期限切れになったあとに、捕虜交換という新たな要求が出てきたことは、IS的なロジックからは十分、理解できる。

一方、ISは、ISと名乗る以前から、数あるイラクやシリアの武装組織のなかでも、その残虐さで知られ、これまで多数の人質を殺害してきた。日本を含む西側メディアではほとんど触れられることがないが、数えきれないイラク人やシリア人がISの人質になり、殺害されていたという事実を忘れてはならないだろう。

ISとなっただけでも、彼らに殺害された欧米人の人質の数はけっして少なくない。たとえば、

- ジェームズ・フォーリー（米国人ジャーナリスト，2014年8月殺害）
 - A Message to America（フルカーン）
 - 米国に軍事攻撃を中止するよう呼びかけ
 - フォーリーのことは
 - スティーブン・サトロフ殺害を予告
- スティーブン・サトロフ（ユダヤ系米国人ジャーナリスト，2014年9月殺害）
 - A Second Message to America（フルカーン）
 - サトロフのことは
 - 米空爆非難
- デイビッド・ハインズ（英国人援助関係者，2014年9月殺害）
 - A Message to the Allies of America（フルカーン）
 - ハインズのことは（英政府批判）
 - 英政府のクルド軍事支援，軍事攻撃を非難
- エルベ・グルデル（フランス人旅行家，2014年9月殺害）
 - アルジェリアのカリフ制の兵士からのメッセージ（アラビア語）
 - アブームハンマド・アドナーニーのことは（不信仰の米国人やヨーロッパ人，とくに汚いフランス人，オーストラリア人，カナダ人，IS攻撃の連合に加わっている国の市民を含む不信仰者たちを殺せ）を引用 [al-'Adnānī 2014]
 - 24時間以内にIS攻撃の中止を放送で公式に発表するようフランスのオランダ大統領に呼びかけ
 - Message de sang pour le gouvernement français（アラビア語・フランス語）
 - グルデルのことは（フランス語）。オレンジ色の服を着せられていない。
 - フランスのアルジェリアやマリでの行動を非難，IS攻撃をやめるよう呼びかけ。
 - 首を切断
- アラン・ヘニング（英国人援助関係者，2014年10月殺害）
 - Another Message to America and its Allies（フルカーン）
 - ヘニングのことは（英議会批判）
 - 英議会のIS攻撃決定を非難，ピーター・カシグ殺害を予告
- ピーター・カシグ（米国人援助関係者，2014年11月殺害）
 - 罰当たりどもにはさぞ迷惑であろうけれど Although the disbelievers dislike it（アラビア語／英語字幕）⁽²⁾
 - ISの歴史等，シリア政府軍兵士の首を切断。
 - 場所はダービク？カシグの切断された首。米国の軍事攻撃を非難

などがある。このうちエルベ・グルデルは，ISに忠誠を誓ったアルジェリアの武装組織，「カリフ制の兵士Jund al-Khilāfa」によって拉致され，殺害されているが，それ以外はいずれもIS本体の犯行とみなされている。

また、グルデル以外は全員、上述した日本人2人の人質に関連してビデオに登場した人物が殺害に関わったとされている。IS 建国宣言後に IS の発するビデオで公になった欧米人人質のなかで、いまだ生存中のものには、英国人ジャーナリストのジョン・キャンティルがいるが、彼は、IS のプロパガンダに利用されており、2014年9月から「お耳を拝借」シリーズで IS の統治を紹介したり、正当化したりするビデオに登場している。

米軍は2014年8月8日、イラクでの空爆を開始、フランスおよび英国がつづいた。さらに9月22日にはシリアでの攻撃もはじまった。シリア空爆に関しては、中東からはサウジアラビア、アラブ首長国連邦、バーレーン、カタールといった GCC 諸国、そしてヨルダンが加わった（ただし、カタールについては作戦支援）。一連の人質殺害が、有志連合による空爆開始後の2014年8月以降にはじまった点は、この作戦が、有志連合の軍事活動への反応だとみていだろう。上に引用したアドナーニー報道官の声明は2014年9月20日前後にインターネット上に公になっている。このなかにはいわゆる有志連合の空爆に参加していなかった国も名指しで非難されており、若干矛盾をはらんでいる。

一方、軍事活動に反応したといっても、人質解放を空爆中止の条件に挙げているのはエルベ・グルデルのケースだけで、この場合のみ24時間という猶予が示され、それが過ぎた段階で殺害されている。それ以外はほぼ一方的に殺害されているといってよく、英国も軍事作戦に参加する以前から殺害対象になっている。

また、これら日本を含む西側の人質殺害のすべてに関わっているのがジハーディー・ジョンと呼ばれる人物である。彼、および彼を含むグループが西側人質をあつかう担当なのかもしれない。

ヨルダン人パイロットの火あぶり

2015年2月3日、ISはツイッター上で声明を発表、フルカーンのクレジットのついた新たなビデオ（Shifā' al-Ṣudūr (Healing the Believers' Chests)）へのリンクを張った。ビデオは22分を超えており、人質ビデオとしては異例の長尺であった。このなかでISは、ヨルダン人パイロットのムアーズ・カサースベを生きのまま火あぶりにするというきわめて残虐なまようを公開したのである。

ビデオはバスマラ（「慈悲深き慈愛遍きアッラーの御名において」というアラビア語の定型句）からはじまり、ヨルダンのアブダッラー国王の訪米や米国のオバマ大統領との会談のまようなどを流し、ヨルダンが米国など有志連合（彼らのいう十字軍）と密接な関係を有していることを強調している。また、英語やアラビア語の報道を挿入し、さらにCGを多用するなど、きわめて凝ったつくりになっている。

その後、カサースベ自身によるアラビア語のモノローグがはじまるが、その内容の一部は、2014年12月末に刊行された『ダービク』第6号に掲載された彼のインタビューと重なる部分があり、インタビュー自体が『ダービク』刊行前に撮影されていた可能性も否定できない [The Capture of a Crusader Pilot 1436]。しかも、『ダービク』でのインタビューでもこのビデオのモノローグでもカサースベは同じようなオレンジ色の服を着せられており、さらに顔の傷のぐあいや髪の毛の長さなどからも、『ダービク』の記事と

ビデオのモノログが同一のものからとられた可能性はきわめて高いだろう（しかし、『ダービク』は英語で出されており、今回のビデオでカサースベはアラビア語を話しているため、両者を逐語的に比較することは困難である）。

カサースベはヨルダン軍や他のアラブ諸国軍の軍事作戦について詳細に述べ、最後にヨルダン国民へのメッセージを伝えた。彼は「われわれの政府はシオニストの裏切り者である。イスラームを守りたいと望むなら、どうしてヌサイリー軍^③に飛行機を派遣しないのか」と語り、さらに（ヨルダン軍）パイロットたちの家族に向け、子どもたちにISを攻撃するのをやめさせ、「わたしのようなことが二度と彼らに起こらないよう、わたしの家族、妻、親族のようにあなたがたの家族が悲しまないようすべきだ」と呼びかけた。

その後、カサースベは沙漠らしき場所にある破壊された建物跡を多数のIS側兵士の並ぶなか歩かされる^④。なお、このときのカサースベは明らかにヒゲが伸びており、インタビューから少なくとも数日は経過していることが想像できる。また、1月28日のビデオで後藤氏もたされていた写真に写っているカサースベと今回のビデオのカサースベが同一の場面かどうかは、ヒゲの濃さがかなり違うようにも見受けられるので、個人的には確認できていない。

この間、有志連合の空爆による被害や遺体・負傷者と思しき映像が差し込まれる。そして、場面が変わると、檻に入れられたカサースベが映される。ついで「十字軍連合」によって攻撃された部隊の司令官が松明をもって登場し、カサースベの入れられた檻までつづく導火線の役割を果たす可燃物に火をつけた。この間、カサースベに火がつき、崩れ落ちるまでの様子がビデオに収められ、さらにカサースベの入った檻のうえに、トラクターのような重機を使って瓦礫を落とし、そのうえを踏み固めるということまで映されている。

ちなみに上に紹介したISの欧米人や日本人殺害ビデオには、殺害する場面そのものは入っていない。かつてISの源流のひとつとされるイラクのアルカイダは、欧米人だろうが日本人だろうが、首を切断する場面もビデオで公開していた。ISはそれとも欧米の視聴者を意識しているのだろうか。しかし、そのISも、欧米人や日本人以外では殺害場面をビデオで公開するケースがあり、明らかに日本人2人とカサースベは、殺害方法以外にも異なるあつかいを受けていることがわかる。

そのあとは場面が変わって、有志連合に加わったとされるヨルダン人パイロットの名前が暴露され、彼らを殺したものに100金ディーナール^⑤の賞金を出すというキャプションがアラビア語と英語でつけられた。さらに衛星写真でパイロットたちの自宅と思しき場所が緯度経度をふくめて特定されている画像をつけるなど脅迫としてもきわめて悪質な方法といえる。

さらにISは殺害ビデオ公開後、新たな声明を「総合治安局 Dīwā al-Amn al-Ām」名で発出、52人のヨルダン人パイロットの名前と居住する地域などを列記し、彼らの殺害を呼びかけている。

火あぶりという殺害方法

ISが扱ってたつシャリーアにおいては、火によって人間を殺害することを明確に禁じている。たとえば、それに関する以下のブハーリーのハディースは有名である。

アブー・フライラは語った。神の使徒は我々を別働隊として送るとき、「もし汝らがクライシュ族の何がしと何がしの二人に出遇ったならば、彼らを火あぶりにせよ」と命じた。そこで出発にあたって我々が別れを告げに行くと、彼は「先程わたしは二人を火あぶりにせよ、と汝らに命じたが、火あぶりの刑はアッラー以外なすべきではない。よって、彼らをつかまえたならば、斬り殺せ」といった、と。[牧野 2001, 3, 153]

イクリマによると、イブン・アッバースはアリーが罪人を火あぶりにしたことを聞き、「わたしならば彼らを火あぶりにしなかつたらうに。というのは、預言者が『神の罰で罰してはならない』と命じたから。むしろ、わたしは『正しい宗教を捨てて他の教えに走る者を殺せ』という預言者の言葉に従って、彼らをただ殺すだろう」と言った。[牧野 2001, 3, 173]

ここで重要なのは、火あぶりが許されないというのが、単に残虐だからといった意味ではなく、火あぶりは、アッラーが地獄で罪びとを罰する方法であり、現世において人間が人間を罰するのに用いる方法ではないと考えられていることである。

IS側がこのハディースを知らないとは想定しづらい。もし、知らなかったとしたら、ISの存立基盤をゆるがしかねない問題だ。おそらくそれを知ったうえで、なおかつその行為を正当化しようとしているのだと推測できる。そのことは、彼らが引用しているイブ・タイミーヤのものとする文章に見てとることができる。以下はその部分である。

一般的な身体損傷刑罰 al-tamthil al-shā'i⁽⁶⁾に関していうと、それが彼らを信仰に導く呼びかけであり、攻撃をやめさせる抑止であるなら、それは、ここにおいてハッド刑 ḥudūd や合法的なジハード al-jihād al-mashrū' の確立 (のひとつ) である。

ここに引用されている文章から判断すれば、残虐な刑罰であっても、見せしめによって、イスラームの信仰を拡大したり、異教徒などからの攻撃を抑止したりする効果があるなら、許されるというふうに解釈できるかもしれない。

一方、別の視点から火あぶりを正当化するイスラーム国のファトワーもインターネット上に拡散している⁽⁷⁾。これは、ISの調査・ファトワー委員会 Hay'a al-Buḥūth wa al-Iftā' の出したファトワー第60号となっており、日付はヒジュラ暦1436年第2ラビーア月17日で、これは西暦では2015年1月20日に相当する。それによると、

ハナフィー派とシャーフィイー派は火あぶりが絶対に許されるとし、「火あぶりの

刑はアッラー以外なすべきではない」という預言者のことばを謙遜 al-tawāḍu' であるとみなしている。ムハッラブ al-Muhallab によれば、「この禁止 al-nahy は禁止 al-tahrim ではなく、謙遜の方法 sabil である」という (Fath al-Bārī 6/174)。

イブン・ハジャール Ibn Ḥajar は次のように述べた。「教友たちの行動は、火あぶりが許されることを示唆している。預言者は、ウライナ 'Urayna 族の目を熱い鉄で突いた。またハーリド・ブン・ワリードはリッダの民 Ahl al-Ridda^⑧の人びとを火あぶりにした (Fath al-Bārī 6/174)。

一部の知識人は、火あぶりは根本的に禁じられているものの、同害報復 al-mumāthala としては許されるとみている。預言者は、正伝集にあるように、報復としてウライナ族にそれを行った。そこでは彼は彼らの目を火で突いたのである。このことは証拠のたしかなことばに現れている。

また、IS のラジオであるバヤーン・ラジオはカサースベが「墜落前に自分の飛行機の火でムスリムたちを焼いたことに対する罰として火あぶりにされ殺された」と報じ、明確に同害報復が意識されている。つまり、空軍のパイロットであるカサースベの爆撃 (火) によって、イスラーム国側の人間が殺害されたため、それと同じだけの罰を与えることが許されるというロジックである^⑨。実際に火をつけたのが、「十字軍連合」によって攻撃を受けた部隊の司令官とされるのは、報復の権利が、被害者、あるいは被害者の親族に与えられるという規定を意識したものかもしれない。

興味深いのは、リッダの民への言及で、彼らのことをしばしば背教者と呼んでいる。上の引用では、イスラーム共同体から離反したリッダの民を火あぶりにすることは火あぶりにしても当然だということが読み取れる。リッダの民はしばしば背教者 murtadd と呼ばれているが、実はカサースベ自身、『ダービク』のインタビューでは背教者のレッテルを貼られていたのである [The Capture of a Crusader Pilot 1436]。

なお、上述のファトワーがISの本当のものであるとすると、日付が1月20日付になっているのは明らかに、それ以前に彼らが出した声明と矛盾する。つまり、彼らの主張を信じるならば、1月29日まではカサースベは生きていなければならず、それ以前に、火あぶりを正当化するファトワーを出していたということは、期限前に彼が殺害されていたか、少なくとも火あぶりによる処刑がすでに決定していたことを表している。いずれにせよ、重大な信義違反といえるだろう。1月3日にはカサースベがすでに殺害されていたとするヨルダン軍側の主張が何を根拠にしているのか、現時点では不明だが、上に紹介した『ダービク』でのインタビューとビデオでのインタビューの一致など、カサースベが予告された期限のかなり前に殺害されていた可能性は十分ある。

ちなみに火あぶりビデオに引用されたイブン・タイミーヤについて、イブン・タイミーヤの著作からの直接の引用ではないとの指摘も出ている [al-Ḥayā, Feb. 6, 2015]。それによると、実際には14世紀のハンバリー派法学者、イブン・ムフリフ Ibn Mufliḥ の書 (Kitāb al-Furū') からのものであるという。

日本人質・カサースベ殺害事件の分析

IS側のカサースベ殺害に対し、ヨルダン政府側は迅速に対応、軍事的な報復を示唆するとともに、ISから釈放を求められていたリーシャーウィー死刑囚、および、彼女と同様にヨルダンで収監されていたジヤード・カルブリーZiyād Khalaf al-Karbūlī¹⁰⁰の死刑を執行した。

こうした対応をみるかぎり、ヨルダン側の怒りはきわめて大きく、ヨルダンが今後有志連合における軍事活動を抑制する可能性は低いと思われる。むろん、国民レベルでは、有志連合からの撤退といった声が出ることはあるだろうし、また政府に対する批判も出てくるかもしれない。しかし、ヨルダン現体制を支える軍や部族からみれば、カサースベの火刑はぜったいに容認できないものであり、目に見えるかたちで報復的な措置が行われないかぎり、後に引くことはむずかしいだろう。

また、これによってISは、ヨルダンのみならず、全イスラーム諸国の、少なくともメインストリームのイスラームを敵に回してしまったことになる。そしてそれだけでなく、それまでISに同情的であった過激な言説を唱えるイデオログや法学者たちからも激しい非難を受けることになった。なぜ彼らがこのような方法で捕虜の処刑を行ったのか、その真意は現時点でははっきりわからないが、いずれにせよ、これをきっかけに多くの支持者が離反する可能性もあり、致命的な失策となることも否定できない。

一方、日本人質事件に関するIS側の意図については、筆者自身の個人的な見解ではあるが、少なくともIS側が後藤氏の妻に対し直接的に身代金を要求していたとされる段階では、明らかに金目当てであったといえるだろう。しかし、いったんそれがインターネットに公開された時点で、金目当てから別の目的、すなわちメディアを利用してみずからのプレゼンスを示すという宣伝目的に変化したと考えられる。

彼らの公開するビデオの内容で判断するかぎり、法外な身代金要求もそうだし、場当たりのともとれる彼らの動きからも、彼らが日本政府やヨルダン政府と本当に交渉をもとうとしていたかどうかは疑わしいといわざるをえない。

結果的にいえば、IS側も、身代金にしろ、リーシャーウィーの解放にしろ、要求はまったく満たされなかったことになる。しかも、釈放を要求していたリーシャーウィーは、カサースベの殺害を受け、死刑を執行されてしまった。この点からみても、彼らにとって、リーシャーウィーがそれほど重要な人物であったとは考えづらい。

また、もうひとつの問題として、日本人質殺害とカサースベ殺害のあいだの明白な相違点を挙げなければならない。前述のとおり、日本人質殺害では最初と最後の場面で同じ人物、すなわちジハーディー・ジョンが重要な役割を果たしていた。しかし、カサースベに関しては、彼はまったく関わっていないのである。日本人質事件との関係でカサースベの名前が直接言及されたのは1月27日にインターネット上に投稿されたビデオがはじめてで、その後、後藤氏の妻のメッセージのなかでも名前が言及されている。しかし、ジハーディー・ジョンが登場するビデオでは一切、カサースベの名に触れていない。つまり、日本人2名とカサースベが、IS内の別のグループによってハンドリングされている可能性も指摘できるだろう。カサースベが火あぶり殺害されるビデオにも、

ジハーディー・ジョンは、姿はもちろん音声でも出てきていない。

可能性としては、日本人は欧米人と同じあつかいになっており、だからこそジハーディー・ジョンが要所要所で登場してきたが、カサースベのインタビューや処刑は、おそらく別のアラブ人をあつかうグループが担当していたことが推測される。

ISの日本人人質関連声明のなかで、1月20日の身代金要求ビデオと2月1日の後藤氏の殺害されたビデオ、そしてそれらのあいだに出された一連の声明には、ビデオの作りかたそのものに大きな差があることが指摘されている。1月20日と2月1日のビデオだけにフルカーンのロゴがついており、全体としても動画としてきちんとした作りになっているのに対し、それ以外は音声と静止画のみの単純な作りになっているなど不可思議な点があったのである。これが、単にビデオ作成のための作業時間の問題なのか、それとも別のグループが作成したためなのか、現時点で判断することはむずかしい。あるいは、日本人人質とカサースベの問題を絡めたい別のグループが口出しをしたため、ビデオ作成の時間が足りなくなったという解釈も成り立つだろう。

今回の事件は結果的には2人の日本人の命が失われるという悲劇的な結末で終わってしまった。しかし、これで日本の中東政策が後退するようなことになってはテロに屈したという印象を与えかねず、むしろ逆効果であろう。今後の日本の中東政策、あるいは日本人（とくに中東に駐在する日本人）の安全確保のためにも、今回の日本人人質事件を風化させてはならないはずである。

慎んで湯川遥菜氏、後藤健二氏、そしてヨルダン空軍のムアーズ・カサースベ中尉のご冥福をお祈りいたします。

追記

2015年2月12日、ISは英文機関誌『ダービク』第7号をインターネット上で発行した。その緒言の部分で彼らは、人質事件における日本政府の対応を批判するとともに、日本・ヨルダン政府とISによる人質交渉について具体的な経緯を述べている。それによれば、最初の期限が過ぎて湯川氏を処刑したのち、日本の代表が「背教者」のヨルダン政府に相談したため、IS側は即座に後藤氏との交換でリーシャーウィーを釈放することを要求した。しかし、ヨルダン政府は無謀にも人質交換交渉にパイロットを含めようとしたため、問題を複雑化させてしまった。「カリフ国」は、ヨルダンの独裁者側の代理人、アーシム・ターヒル・バルカーウィー（アブームハンマド・マクディシー）との交渉のなかで、パイロットについては他の計画があるとして、明確にそれを拒否した。最終的にはバルカーウィーの背教者のクライアントと日本人の捕虜は、両国政府がISの警告を無視したために、処刑された。後藤健二氏および背教者のパイロットの親族は、米国の十字軍におもねる政治指導者を非難するしかない。さらにIS側は、安倍首相の十字軍支援発言以前、日本はISの主要な標的リストには入っていなかったとし、だが今や、日本国民やその権益はすべて、どこであろうと、世界中のカリフ国の兵士や支持者たちの標的となったとも述べている。

(注)

- (1) たとえば、2014年12月25日付のカタールの衛星放送ジャジーラでも、カサースベとの捕虜交換候補としてリーシャーウィーとジヤード・カルブリー死刑囚の名が挙がっている。
- (2) クルアーン第61章8節、第9章32節。訳は井筒俊彦版から。第9章では「信仰なき徒には気の毒だが」と訳されている。
- (3) ヌサイリーは、アラウィー派の別称、ここではシリアのアサド政府軍を指す。
- (4) この直後に公開されたISのビデオから、子どもを含む多くの観客が火あぶりの模様を見学していたことが明らかになった。
- (5) 1金ディーナールは金4.25グラムに相当。したがって賞金は425グラムの金ということになる。なお、彼らのいう金ディーナールは21金と考えられる。
- (6) 同害報復刑 qīṣāṣ として、身体の一部を切断したり、毀損したりする罰。
- (7) このファトワーについて、筆者は出所などについてきちんとたどることができなかった。
- (8) 預言者ムハンマドの死後、一部のムスリムたちがイスラーム共同体を離反した。ハリド・ブン・ワリードは有能な軍事司令官として知られ、リッダ戦争を制圧したことで知られている。
- (9) イスラームにおける同害報復についてはクルアーンやハディースに根拠がある。たとえば、クルアーンでは「これ信徒のものよ、殺人の場合には返報法 qīṣāṣ が規定であるぞ。つまり自由人には自由人、奴隷には奴隷、女には女。しかも、同胞が赦すと言った場合には、正々堂々とことをこぼねばならないし、また立派な態度で償いの義務を果たすのだ」(Q2:173)とか「またもしお前たち、懲らしめようというのなら、懲らしめてやるもよし、だが向こうにやられた程度のことにしておくのだぞ。だが、もし我慢できるものなら、我慢するにしくはない」(Q16:126)などが挙げられる〔井筒 1964〕。前者は、被害者・加害者の身分や人数を制限し、後者は報復の内容を規定している。つまり、「目には目を歯には歯を」を適用するなら、火で燃やされたのであれば、火で燃やすのも認められるという考えかたであろう。
- (10) イラク人のAQI幹部で、ザルカーウィーの側近とされていたが、2006年に逮捕されていた。

【引用文献】

al-'Adnānī, Abū Muḥammad. "Indeed Your Lord Is Ever Watchful." 2014.

"The Capture of a Crusader Pilot." Dabiq, 4 1436 : 34-37.

井筒俊彦, 訳. コーラン. 全3巻. 東京: 岩波書店, 1964.

牧野信也. ハディース——イスラーム伝承集成. 全6巻. 東京: 中央公論新社, 2001.